

兵庫県但馬地方⁽¹⁾における人とコウノトリの関係論

—コウノトリをめぐる「ツル」と「コウノトリ」という語りとかかわり—

菊地 直樹

(姫路工業大学／兵庫県立コウノトリの郷公園)

兵庫県北部の豊岡市では、1971年に野生下で絶滅したコウノトリの野生復帰に向けた取り組みが行われている。人とコウノトリの共生という理念は広範に受け入れられている一方で、稲を踏み荒らす害鳥という声も聞かれ、共生への協力や啓蒙の必要性が主張されている。野生復帰のように自然との共生という枠組みで地域社会のあり方を模索する場合、自然とどうかかわるかが重要な問題となるが、コウノトリと接しながら生活してきた人たちはどのようにかかわってきたのだろうか。

コウノトリを聞き取る調査の場で、多くの人が2つの呼び方でコウノトリを語った。ツルとコウノトリである。語りを検証する中で、生活に埋め込まれた存在として語られるコウノトリを「ツル」、学術的な価値を持った保護すべき対象として語られるコウノトリを「コウノトリ」と規定し、語りから人とコウノトリのかかわりのあり方を考察した。「ツル」では、人とコウノトリの間には自然への働きかけの濃淡に基づいた可変的なかかわりがあった。「コウノトリ」ではコウノトリとのかかわりは希少性といった保護概念を軸にしたものに特化した。保護という価値へ関与しない人はコウノトリとのかかわり自体がなくなり、遠い対象と認識されるようになった。

「コウノトリ」に限らない人とコウノトリの関係性の再構築に向けて、コウノトリを近くしていた自然への働きかけの意義を現代社会の生活様式の中で問い直すことが野生復帰の課題になる。

キーワード：コウノトリ、野生復帰、働きかけ、「ツル」、「コウノトリ」

1. はじめに

1.1. 一枚の写真

1960年8月に兵庫県北部の但馬地方の出石川で高井信雄氏が撮影した写真(写真1)には、但馬牛と女性と12羽のコウノトリの姿が映っている。女性は、高齢にはなったが現在も畑仕事をしているという。この写真は後に人とコウノトリの「共生」を象徴するものとなった。しかしコウノトリと牛と人間が川辺で共にいる風景を、今を生きている私たちは見ることはできない。なぜなら農業の機

写真1 人と牛とコウノトリ



提供：富士光芸社

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

械化が進み農耕用の牛が飼われなくなり、人も川辺に寄りつかなくなったからである。何より1971年にコウノトリは日本の空から消えてしまったからである。この写真から11年後に日本のコウノトリは野生下で絶滅したのである⁽²⁾。

長年にわたる保護増殖事業が実り、絶滅から28年後の1999年11月、兵庫県豊岡市に県立コウノトリの郷公園（以下、郷公園）が開園し、コウノトリの野生復帰に向けた取り組みが始まっている（池田2000, 内藤・池田2001, 池田・菊地2002⁽³⁾）。野生復帰という取り組みは、狭義には絶滅の危機にあるコウノトリという種を飼育下で繁殖させ、その種の自立した個体群をふたたび確立しようとする再導入（reintroduction）と定義できるが（池田2000：574）、広義にはコウノトリがかつて生息していた地域社会の自然環境と文化を総体として保全・創造し、今後コウノトリも棲める地域社会のあり方を模索する試みの総体といえる。一般に、広義の意味で野生復帰はとらえられ、豊岡市や但馬県民局の各施策に人とコウノトリの共生という理念が取り入れられている⁽⁴⁾。行政だけに限らない。郷公園周辺地域ではコウノトリ市民研究所といった市民団体や減農薬の野菜などを栽培・販売するコウノトリの郷朝市友の会、豊岡あいがも稲作研究会といった農業者団体などの活動が展開している（菊地2001）。この写真は、人とコウノトリの共生の歴史的イメージとして位置づけられている。

1.2. 人とコウノトリの共生という枠組み

現在、「豊岡盆地では豊かな自然環境と人々の暮らしが融合し共生社会を構成していました」「コウノトリ保護運動は……地元の人びとのコウノトリを愛する気持ちから出発した」という共生への言説が生み出されている。男女を問わず16歳以上のすべての年齢層で6割前後の人がコウノトリを「豊岡市で自慢できること」と回答しているように（豊岡市2001：92）、人とコウノトリの共生というイメージは広範に受け入れられているようである。その一方でコウノトリはかつては稲を踏む「害鳥」だったとか、行政への「人とコウノトリ、どっちが大事なんだ」という声も聞こえてくる。それに対して、害鳥と言う農業者の協力や合意を得ることが必要という言説が生み出されている。一方でコウノトリとうまくつきあい、熱心な保護運動が展開されたといわれ、他方で協力や合意形成の必要が強調されている。こうしたギャップは、共生という枠組みが生物多様性や希少性といったコウノトリの「学術的価値」への地域住民の協力と合意形成という関係性を前提にしていることに起因しているのではないか。この枠組みでは、コウノトリとうまく接してきたとされる地域住民は野生復帰への協力者へと啓蒙される対象としか位置づけられない。地域住民にとっても野生復帰は外からの論理としてしか呈示されないだろう。野生復帰を人とコウノトリの関係性の再構築とするならば、まず求められるのは自然保護概念のあるべき価値と前提した関係性を所与とするのではなく、コウノトリと接しながら生活してきた人々とコウノトリのかかわりのあり方に内在的に迫ることではないだろうか。

コウノトリの野生復帰のように自然との共生という枠組みの中で地域社会のあり方を模索する場合、自然と社会の相互関係の中でどのように自然とかかわっていくかが重要な問題（丸山1997：151）となるが、コウノトリと接して暮らしてきた人はコウノトリとどのようにかかわってきたのであろうか。以上の関心に基づき、本稿は但馬地方の人びとのコウノトリ経験をめぐる「語り」を手がかりに、人とコウノトリのかかわりのあり方を明らかにすることを目的としたい。

課題は、現在人とコウノトリの共生と枠づけられた兵庫県但馬地方における人とコウノトリのかかわりのあり方を生活の現場の視点からとらえ直すことである⁽⁵⁾。それは、断絶を前提としない人とコウノトリとの新たな関係のあり方を模索することに他ならないだろう。

2. コウノトリ保護史⁽⁶⁾

コウノトリ (*Ciconia boyciana*) は、シベリア東部のアムールからウスリーにかけての湿地帯に主に生息する、翼長が2 m 近くになる大型の鳥である。生息数は、ロシア、中国などを合わせて約 2000~2500 羽と推定されている。IUCN (国際自然保護連合) のレッドリストでは、「絶滅危惧種」に指定されている (IUCN 1993 : 37)。食性は肉食性で、ドジョウ、フナなどの魚類、カエル、ミミズなどの小動物を主な餌としている。松の大木などの樹上に直径1~1.5 m ほどの巣をかけ、3月から4月にかけて4~5個産卵する。約1ヶ月で孵化し、その後約65日で巣立ちする。日本で繁殖する数少ない大型鳥類であったコウノトリは、江戸時代には東北から九州にかけて生息の記録があった (安田 1987 : 63, 寺山 2002 : 199-200)。日本では、田んぼが湿地帯の役割を果たしてきたので、人間とコウノトリの生活範囲はクロスオーバーする。コウノトリは人間の生活と非常に密接につながった生き物であった。

但馬地方は江戸時代からコウノトリの生息地として知られ、出石藩主が藩有の桜尾山を「鶴山」と名づけて禁猟区とし、瑞鳥として保護していた。しかし、明治になって狩猟の規制がなくなると、日本各地で大型鳥類の密猟が横行した。1908年に狩猟法の保護鳥となったが、既にその頃には、事実上、但馬地方だけにしか生息しなくなった。但馬地方でも一時期減少したが、1904年から繁殖を始め、天然記念物指定などの保護措置によって羽数は増加し、1930年頃には約100羽が生息していたと推定されている。当時、営巣地であった鶴山には茶店が開設され、巣ごもり期を中心に賑わったという。

しかし1943年、建築用材や松根油を得るために鶴山の松が伐採され、コウノトリは八鹿町や豊岡市に広く分散した。その後、農薬の使用や耕地整理などにより羽数は漸次減少し、1959年に豊岡市福田で1羽が巣だったのを最後に日本では野生下での自然繁殖はみられなくなり、1971年に野生最後の個体が、保護の後、死亡し、日本のコウノトリは野生下で絶滅したのである。

コウノトリの絶滅を強く心配した山階鳥類研究所の山階芳麿所長は、阪本勝兵庫県知事 (当時) に保護を強く依頼した。それを受けて、知事の提案で豊岡市長を会長とするコウノトリ保護協賛会 (後、但馬コウノトリ保存会) が設立され、本格的な保護運動が始まったのは1955年である。但馬コウノトリ保存会はコウノトリの生息・生態調査を実施し、人工巣塔の設置 (1959年) や餌場の設置、地元住民による保護員の設置などを行った。また小中学校の協力のもと人工餌場に供給するドジョウを集める「ドジョウ一匹運動」、民間団体による保護基金活動などが展開された。しかし、コウノトリの羽数は減り続けていた。このため1963年から野生の巣から採卵しての人工孵化が開始され、1965年からは豊岡市福田で1ペアを捕獲し、人工飼育が開始された。しかし、ペアの形成がうまくいかなかったことなどもあり、人工繁殖は成功しなかった。

1985年、ソ連 (当時) のハバロフスクから贈られた6羽の幼鳥を創設ペアにして人工飼育か

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

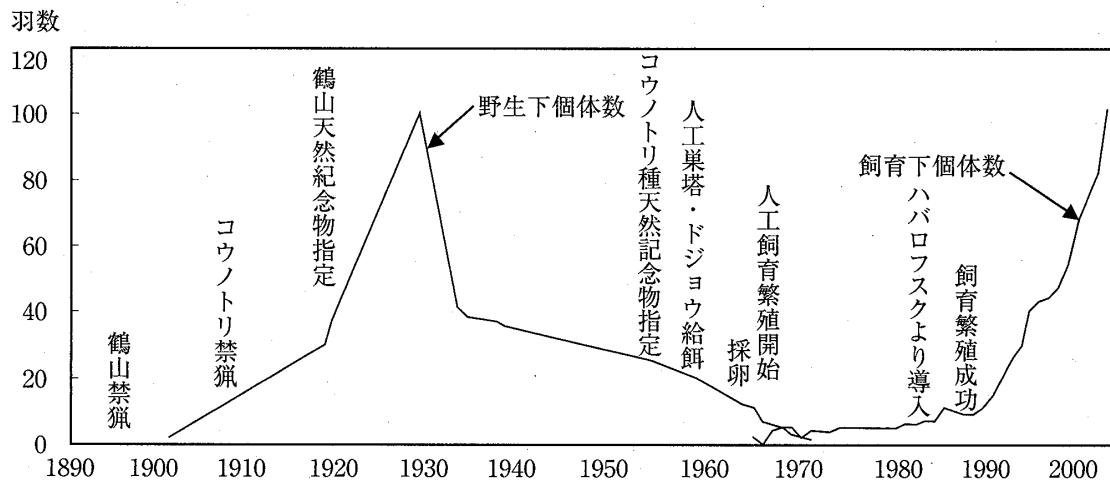


図1 コウノトリの羽数の変遷

ら24年たった1989年、ヒナが誕生した。これ以降、飼育下繁殖は順調に進み、2003年2月27日現在100羽のコウノトリが飼育されている。そして飼育下で生まれた個体を野外に戻す野生復帰が計画され、その拠点として郷公園が1999年11月に開園、豊岡市立コウノトリ文化館が2000年6月に開館した。現在、2005年の試験放鳥に向けた様々な取り組みが行われている。

3. 語られるコウノトリ

3.1. 人とコウノトリ：聞き取り調査からの探究

但馬地方における人とコウノトリのかかわりは、ほとんど記録されていないし、語り継がれてもいない。筆者らはコウノトリと接して生活してきた人々の知識や経験に注目し、かつてのコウノトリの生息状況とコウノトリのかかわりを記録するコウノトリ歴史資料収集整理等事業（歴史事業）を実施した⁽⁷⁾。

生活と自然という観点から人々のローカルな知識や経験に注目する研究として、まず生活環境主義の諸研究を指摘できる（嘉田2001，嘉田・遊磨2000，鳥越・嘉田編1991）。自然を社会的存在としてとらえた上で人間と自然の関係性を論じている点で注目に値するが、生活環境主義では、ホタルの研究を除いて特定の生物とのかかわり、とりわけコウノトリのように負荷をも与える動物とのかかわりに関してはほとんど論じられていない。人と動物との親和的ではない関係性が問題にされないのである。もう1つ注目すべきものとして、マイナー・サブシステムに関する諸研究がある（菅1998，松井1998）。人と自然のかかわりを媒介する身体性という視点を提示している点で注目できるが、資源となる動物を対象としており、資源でなかったコウノトリのような動物はほとんど論じていない⁽⁸⁾。

ところで、なぜコウノトリについては記録はもとより、語られることすらほとんどなかったのであろうか。資源でなかったこともあるが、Aさんは以下のように語った。

今でこそコウノトリ、コウノトリ言いますけどなあ、その時分は……コウノトリがおるのも当たり前ですし……。気持ちのコウノトリにどうこう、そんな関心は全然薄かったです

なああ。当たり前のことですかなああ。

コウノトリは、当たり前でいたからこそ語るのが困難なのではないか。ここに日常的であるがゆえに伝達が困難である暗黙知の問題を指摘できる。「知的であろうと実践的であろうと、外界についての我々のすべての知識にとって、その究極的な装置は我々の身体である」(Polanyi, 1966=1980: 32)。マイナー・サブシステム研究の指摘とも重ねると、コウノトリは身体性のもとにとらえられたと考えられる。では、資源でなく日常的にいたがゆえに語るのが困難なコウノトリとのかかわりにどのように接近できるのであろうか。

近年、差別経験や戦争体験など語られてこなかった経験を把握する手法として注目されているライフストーリーに関する諸研究は、語りから生活の総体を描き出すことによって、日常生活における差別経験や戦争体験の諸相を明らかにしようとしている(反差別国際連帯解放研究所しが編 1995, 桜井 2002)。問題が異なっているが、その手法を参考に、コウノトリがいた日常生活を聞き取り、日常生活におけるコウノトリ経験の諸相に接近することで人とコウノトリのかかわりを明らかにできると考えた⁽⁹⁾。したがって、コウノトリを聞き取る場では、コウノトリについて「何を語ったか(目撃など)」とともに「どのように語ったか」という語りの様式や語り手自身のリアリティ、語りの文脈にも注意を払うことにしたのである⁽¹⁰⁾。

聞き取り調査というコウノトリをめぐる語りの場で、ほとんど語られてこなかったコウノトリはどのように語られるのか。多くの語り手は「私には語ることはありません」と語り始める。けれども、調査者が「どこでコウノトリを見ましたか」と問いかけると、コウノトリから農業、田んぼ、川、遊び、戦争、宗教等と語りは相互に入り込みながら多様に広がっていく。1時間から2時間にわたる語りは「こんな話なんの役にもたんで」という言葉とともに終了することも多い⁽¹¹⁾。以下では歴史事業の聞き取り調査で語られたコウノトリを展開する。

3.2. 語りの中の二つコウノトリ

多くの語り手が、決まり文句のように語ることがある。Bさんは次のように語った。

コウノトリいうことは言わなんだですがな。ツル言って。なんでコウノトリ、なんで。わしらほんとにコウノトリっちなもんはこの地区におれへん、ツルはおったけど、不思議だったな、わしらは。そりゃもう馴染めなんだですな、コウノトリという言葉に。

こうしたツルという語りは、70代以上の語り手にかなり共通する。かつてコウノトリはコウヅルや田鶴と呼ばれ、ツルと混同されてきたという(寺山 2002: 200)。但馬地方でも営巣地が鶴山と名づけられていたように、一般にツルと呼ばれていた。この語りでのツルも生物学的にはコウノトリのことを指しているに違いない。ツルという呼び方は、訂正すべき単なる言い間違いなのだろうか。そこでコウノトリという正式名称をいつ頃知ったのか、確認してみよう。

Q(筆者)：いつぐらいからコウノトリって言うようになったんですかね？

C：わしら意識したんはやっぱり、この一あの一新聞なんかに出だしたネットで獲った時

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

分（1965年）から。

Q：あー、そのへんからコウノトリって。

D：その頃からだったかなあ、まあコウノトリって言うようになったのは。それとまあ、その非常にまあ少なくなってきて、貴重なあれだというようなことを聞かされてからね、まあそんなもんかなあというような。

コウノトリという呼び方は、捕獲といった保護運動や貴重・希少性という価値、新聞報道などとセットになって語られ、専門家や政治家、行政官、マスコミなどによって外から持ち込まれたものと認識されている。対してツルという呼び方では、主に1930年から50年頃のことが語られるが、これは100羽のコウノトリの生息が推定される時期である。その呼び方はローカルなものと認識されており、コウノトリは保護という文脈ではなく生活という文脈で語られる。実際の語りでは両方の呼び方が混在していることも珍しくないが、野生復帰の施設の研究者である筆者が聞き取りをしても、ツルという呼び方で語られることが圧倒的に多いのである。

ツルとコウノトリという呼び方では、コウノトリをめぐる語りの量も内容も様式も異なっている。したがって、ツルという呼び方を言い間違いではなく、語り手によるコウノトリの定義ととらえ、コウノトリに関するローカルな知識と経験に接近してみたい。以下では、生物としてのコウノトリのことをコウノトリ、ツルという呼び方で語られるコウノトリを「ツル」、外から持ち込まれたコウノトリという呼び方に付随して語られるコウノトリを「コウノトリ」と規定し、「ツル」と「コウノトリ」でどのようにコウノトリが語られるかを検討し、兵庫県但馬地方における人とコウノトリのかかわりのあり方に接近したい。桜井厚は語りには一定の様式があり、特定のコミュニティ内で特権的な地位を占める語りをモデル・ストーリーと呼んでいる（桜井2002：35-36）が、「ツル」と「コウノトリ」はモデル・ストーリーといえるものである。

4. 「ツル」というモデル・ストーリー

4.1. 害鳥とツルボイ

「ツル」でコウノトリはどのように語られるのか。コウノトリの目撃について尋ねられたEさんはこう語った。

私らが子ども時分見るのにまあ10羽ぐらいいねえ。あっちゃこっちゃに来て、それから田植えした後も、あのうよう田んぼん中に入って稲を踏みましてなあ、その時分にゃあコウノトリいやへんツルツル言っていましたわ。

田んぼを踏み荒らす「害鳥」として語られ、Fさんが「ボウてボウて、ボウのに。見たいったらボウて。…そんな値打ちのある鳥どこでなかった」と言うように、多くの場合「ツルボイ」（追い払う）という行為とともに語られる。

では、「どのように」ボウていたのであろうか。例えば、前述のAさんは「バサバサ踏み込ん

できますしねええ。うちの田んぼこの辺の道において棒でお前追ってこいっておやっさん言われましてなあ、降りてくるならよそ行けて」と語った。他に石や土を投げるといふボーイ方もよく語られる。ある地域では空砲を撃って追い払うツルオドシという日役もあったという。

次に、「どこ」でツルボーイをしていたのだろうか。Gさんは聞き取り調査の冒頭で語った。

この辺は一畝ずつジルトンぼですから、水があってあの…、乾田ならんもんでねえ、それで、一畝、一畝みんな起こしたんですわ。…じりいのは起こしにくい、歩きにくいでしょうが、起こすのに耕運するのにね、だんだんそれで乾田になりだしたんですわ。で、湿田の当時はやっぱりコウノトリはかなり僕らの子供時分はおりまして、それであの…、田んぼの田植えの後、稲を踏み込みますもんだからねえ、また、植え直しに入らんもんだから、田んぼの隅には必ず補充する苗を2束ぐらい置いたるんですわ。稲がコウノトリが踏み込むもんだから。

多くは田んぼである⁽¹²⁾。但馬地方にコウノトリが生息できたのは、豊岡盆地周辺が円山川が流れる低湿地帯であり、採食場所としての湿田（ジルト・ジュルタ）、河川の浅瀬などが広範囲に存在していたからである。主要な採食場であったジルトは、人間が働きかけてきた生産の場であった。場所によっては農作業中、体が沈まないように胴木という板を沈めていたところや舟で稲刈りをするほど深いところもあった。1年中水が引かない環境だったから、コウノトリのエサになるドジョウやタニシ、フナなどが生息していたが、その反面、農作業は重労働であった。だからこそ、そこに飛来したコウノトリは害鳥として扱われボワれていたのだ。

では、その他の採食場であった河川の浅瀬でツルボーイは行われていたのであろうか。冒頭の写真が撮影された出石川周辺はコウノトリがよく目撃された場所である。特に1930年頃は、40、50羽のコウノトリが毎朝のように見られたという。

この一高井さんの撮られた写真のあれはねえ、あの一あのもんですわ、ブトが来たりね、牛にブトが来たり、それを食べたり、それからさっきお話したように、ここ浅瀬になつとるからジャコがペシャペシャペシャペシャとこうあの小魚、小魚がねえ。そうゆうなんとなつとるようでしたわ。

こう語るCさんは田んぼではボウていたが、牛の放牧地であった出石川河川敷でボウことはなかった。出石川でコウノトリを目撃した人は、牛の放牧や通勤・通学の記憶とともに語り、そこでボットと語る人はいない。むしろそこで見たコウノトリはきれいだったとも語られる。牛の放牧をしていたFさんは、そこでは「牛と鳥と相性がええのかな」と感じていたと語った。

豊岡盆地には、田んぼの灌漑用の掘抜という井戸があった。1年中水が湧いていたため、降雪しても雪が積もらず、年中ドジョウやタニシ、フナなどがおり、餌を求めてさまざまな生き物が集まってきた。コウノトリも主に冬場そこへ餌をとりにきていた。その掘抜でもツルボーイは行われていなかった。逆に掘抜に仕掛けられたカモやイタチを捕るワナにかかったコウノトリは、害鳥として扱われていた頃にもかかわらず、保護されることも多かったという。

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

さらに「いつ」ツルボイしていたかであるが、基本的には、田植え直後の6月中旬から7月上旬頃に行われていた。田植え直後の小さな稲をコウノトリの大きな足が踏み込んでしまうからである。しかし、稲刈り後にはボウことはなかった。Hさんは以下のように語った。「いやーツルがきとる、ボエーいうことで、シーシー言うてボウてボウて、はい、冬の田んぼにツルがあるんですけど、まゝまゝ私らゝ見たらきれいだなゝと」。同じ田んぼにいても、田植え直後は憎い鳥として語られ、稲刈り後は「きれいな鳥」として語られるのである。そして、ツルボイをしていた子どもたちも、稲刈り後の田んぼでは誰が一番コウノトリに近づけるかといった遊びを行っていた。しかし、こうした秋から冬にかけての語りは、相対的に少ない。

このようにツルボイは身体的で直接的なかわりとして、友達や家人や村人とのかわりとともに語られる。それは「でえじな鳥だしけえ、そねえ石投げたりするんじゃねえんだ。てんで(手で)こうしてホーと」というように、「徹底的にボイちらすという事はなかった」。せいぜい「土投げたり、石投げたりして、ボウくらいのこと」なのである。それは「ボイまわして、まゝ遊んどったようなもん」というように遊びでもあった。「ツル」でコウノトリは邪魔な害鳥、遊び相手、きれいな鳥、大事な鳥というように、相反する存在として濃密に語られるのだ。

4.2. 鶴山と瑞鳥

京都府久美浜町のIさんは、害鳥という問いかけに対し以下のように語った。

ツルの巣ごもりゆうたらおめでたいことだ。害鳥ではないという証拠にツルと言ったんだ。コウノトリじゃない、ツルと。鶴亀のツルと。げんのいい鳥ということで店を出したんだ。

コウノトリのことを保護鳥だから、めでたい鳥だからボウことはなかったと語る人たちもいる。1921年に出石町桜尾の繁殖地鶴山が天然記念物指定されたように、保護鳥でもあった。害鳥というストーリーとともに、鶴山に代表される「瑞鳥」というストーリーも多くの人が語る。但馬地方や丹後地方のコウノトリの営巣地は鶴山と呼ばれ、多くの場合、そこにIさんが語る茶店が開かれていた。茶店では酒類やニッキ水、鶴山ようかんなどが販売され、京阪神などからも多くの人が訪れた。その様子をJさんは聞き取りの冒頭で以下のように語った。

山に上がりましたらもう結構、大勢の人が来ておましてなー、茶店も2つ、3つ、2、3軒出ておって、赤いあの毛布敷いて腰掛けとかこさえてましてねー、そして、まゝすぐお茶やなんか持ってきてくれましたし、色々な物売ったりまして、それで私達はツル見とるよりもいい物買って頂けるのが嬉しい喜んでたんですけど、高いあの松の木の上にちょうどあのツルが巣をしとるのがよう見えましてなー、羽根広げますと下に小ちゃいヒナがいるのもよく分かりましたし。

コウノトリを見る宴会などが行われた鶴山は当時の社会において華やかな場所であった。鶴山という語りでコウノトリは「非日常的」な空間での人間関係とともに語られる。田んぼでボウていた子供たちも、鶴山に行くのが楽しみであり遊びの場でもあった。当時、コウノトリは害鳥と

扱われる一方で、鶴山などでは瑞鳥として扱われていた。害鳥として語った農業者たちも、鶴山のコウノトリは非日常的な茶店の思い出とともに美しかったと語ったりするのである。

4.3. 自然への働きかけとコウノトリとのかかわり

Kさんは、害鳥や牛について語った後、次のように語った。

フナゴやなあ、ドジョウ、小魚が…住むところがあって、ようおったです。ほんであんたらも、想像つくか知らんけど、ここの田んぼ、を、今年、今度…時期が来たら水落としてなあ、乾かさなんだら次…あの、稲刈りに入らなんだらんでしょうが。そうゆうドブドブするようなところで(笑)、能率あがらへんしな。ほんで…8月のドヨウホシいって、それがために、あの…言葉が、ドヨウホシちゅう…言葉があるように、田んぼに水を切って、こう…落水したですなあ。そうすると、1ヶ所の…水じめえの、この田んぼの水じめえに、小魚が、ドジョウだのなあ、フナゴ、ほんでハイんやのなあ。…ほらもう、人間が食うの、しれとりますでなあ。鳥(筆者注:サギやコウノトリ)も寄ってきいして、それも落水した…日にやあもう…田んぼは、戦争場みたいなもんで、上の方には…鳥が。

田んぼでのタニシとりや魚とりは、遊びであるとともに生業であり、とれたものは基本的に食べた。田んぼは、稲作、タニシとりや魚とりという複数の生業がおこなわれる空間であった⁽¹³⁾。田んぼにいたコウノトリは田植えやタニシとり、魚とりといった自然への「働きかけ」とともに濃密に語られる。「ツル」で「日常」にいたコウノトリは、それ自体対象としてではなく自然への働きかけとともに語られるのである。川や掘抜といった働きかけが相対的に少ない空間では、「片足上げて朝早ようから一服しとんなるわー」というように「目撃」として語られる。そして鶴山は非日常的な場として語られる。

そこで田んぼという空間でのツルボイに再度注目して自然への働きかけとコウノトリとのかかわりを考えてみよう。田んぼ、特にジルタでの農作業は重労働であり、働きかけが強くなるのは田植え時である。コウノトリにとってもその時期は雛を育てるため大量に餌が必要であった。田植えという強い働きかけの直後に入ってきたコウノトリは基本的に害鳥とされ、様々な方法でボワれた。しかし、稲が成長すると人の働きかけも弱くなり、コウノトリも稲が成長した田んぼにはそれほど入らなかった。そして、稲刈り後の田んぼは町中の人でも近くの鉦山の鉦夫でも基本的には誰でも自由に入れ、タニシや魚をとってもよくなった。ドヨウホシや大水で田んぼがつかった時も誰でも入って魚をとってよかった。働きかけが弱くなった時、田んぼは「私」の意味もっていた空間から「公」の意味をもった空間になる(藤村1994:155-156)。「公」の意味をもった田んぼにコウノトリが入り餌をとっても、ボウ人はほとんどいなかった。コウノトリが入ってもよくなるのである。田植え直後はツルボイしていた子どもたちも、その時期はコウノトリと遊ぶようになる。注目したいのは、働きかけが強く「私」の空間という意味あい強い時期の田んぼに降りたコウノトリは害鳥として扱われるが、働きかけが弱くなり「公」の空間という意味あいが強くなった時期の田んぼや働きかけの弱い空間に降りたコウノトリは魚とりの競合相手やきれいな鳥として見る対象などとして扱われることである⁽¹⁴⁾。「ツル」では、自然への働きかけ

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

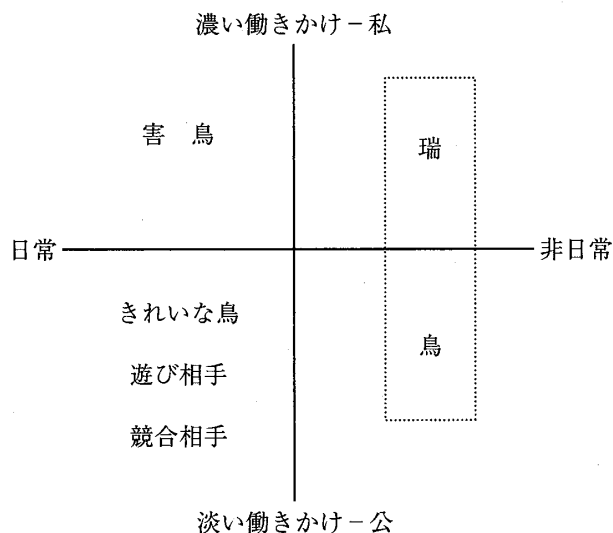


図2 「ツル」としてのコウノトリとのかかわり

濃に基づいた可変的なかかわりがあるのである。図2は働きかけの濃淡（私-公）と日常-非日常という2軸によって可変的なかかわりを図式化したものである。日常的で濃い働きかけの空間にいるコウノトリは害鳥として、日常的で薄い働きかけの空間にいるときれいな鳥や遊び相手や魚とりの競合相手として、非日常的な空間にいると瑞鳥として扱われる。「ツル」において、コウノトリはそれ自体として独立した外的な対象ではなく、濃淡ある自然への働きかけから切り離して経験されないのである。

を媒介に、人はコウノトリを害鳥、きれいな鳥、瑞鳥と、多様な側面をもつ存在として語る。身体的で直接的なかわりを通じて、コウノトリは近い存在として具体的に経験されたから、「語ることなど何もない」コウノトリが多く語られたのではないか。

まとめよう。空間ごとに働きかけの濃淡があり、コウノトリが働きかけの濃い空間・時期、薄い空間・時期、日常的な空間、非日常的な空間にいるかによって、かかわりが異なっていたと考えられる。人とコウノトリの間には境界線ではなく、自然への働きかけの濃

5. 「コウノトリ」というモデル・ストーリー

5.1. 保護という出来事

「コウノトリ」でどのように語られるのか。ツルと呼んでいたLさんは次のように語った。

最近ですなコウノトリでやかましい言いだしたの。まあ気がついた時にはその辺には見あたらなかったです、はい。ちょうど六方田んぼだったと思うんですけど電柱に人工的な巣を作りましてね。その頃から捕獲をしたり飼育するとか言うことで網を使って捕獲したりするような事が始まりましたね。あの辺からですわ。

1955年からのコウノトリ保護運動はメディアで報じられ、社会的関心を集めたが、この頃に関する語りは相対的に均一で量としても多くない。田んぼやツルボイもほとんど語られない。保護の語りも直接的なかわりより、「コウノトリを保護するための電柱だったと思うんですよ。巣が、巣が作って、人工巣が、そこに、留まっているの、それが最後でした」というように、1959年に建てられた人工巣塔や1965年から数回実施された捕獲といった出来事が、多くの場合、語られる⁽¹⁵⁾。そうした出来事を新聞などで知ったという語りも多い。「コウノトリ」では、人工巣塔や捕獲という目に付きやすい出来事とともに保護すべき対象として一元的に語られる。コウノトリは生活や生業といった自然への働きかけから離れ、保護活動という出来事として、それ自体

対象として語られるのである。Mさんが「稲を踏み込んでなあ、百姓の敵でしたんやけどなあ。もう今、貴重な、鳥類になっとってなあ。…害鳥でしたんやけど。まあこうして、数少なくなったら、ま、国の宝ですしなあ、あれも」と語るように、保護によって別の意味を持つようになった。それは、Lさんが語るようにコウノトリに「気がつく」契機でもあった。

5.2. 農薬散布と絶滅

しかし、自然への働きかけが全く語られないわけではない。Nさんは以下のように語った。

真っ先来た除草剤…粉のでしたがな。ほんで土と混ぜて振りましたんだが、素手どもいろいろたら手の皮むくるなんて言いましたんだがな。行きがけにこう、振って行きますと…あの一、振るのから、振るのからオタマジャクシがジャブジャブジャブジャブ、あぜ方にみーんな寄ってな、戻りがけには、もーあぜ方寄ってみんな、死んじまったりしましたで…そんなきつい薬ですさきゃーな、そりゃ、なんでも死んじまいますわ、あんな薬かけちゃったら…。

農薬の散布である。1959年に豊岡市福田で巣立ったのを最後に、コウノトリの自然繁殖はみられなくなったが、これは但馬地方で農薬が本格的に使用され始めた時期とほぼ一致する⁽¹⁶⁾。農薬散布の様子をOさんは述べた。「その重てえもん（筆者注：噴霧器）負うてね、ほれからビニールの合羽着てねほて最初はマスクしたりしてね。えらあてえらあてとって出来れへんですわ。ほで田んぼ中ガサガサ歩いて回ってあの……防除したんですけどな。背中に負ってまあ…ほん……4、5年しましたまあ。それで結局あれであのものコウノトリがあかんようになったんだと思うんですけどなあ」。当時散布された農薬は「よ一効き」、田んぼにいた生き物はことごとく「死んだ」という。「命がけの消毒」は、当時「人間のために悪い事は考えとらへんわいや」と思っていたが、今振りかえると、魚の死など日常的な出来事を通して自らの身体への危機感をつくり、「怖い事したもん」だと評価される。田んぼで魚がとれても「毒があるんだなあってその魚も食べんやあになりました」。ジルタは圃場整備によって乾田化され収量は飛躍的に伸びたが、生き物は見られなくなった。田んぼは米を生産するだけの空間になったのである。

農薬散布という語りは、Oさんが語ったようにコウノトリの絶滅というストーリーへと展開していく⁽¹⁷⁾。農薬散布などによって羽数減少への危機感から始められた保護運動よりも、それと平行な絶滅過程が、農薬散布という生き物を死に追いやり、自らの身体を傷める行為を通して、リアリティあるものとして語られるのである。

5.3. 希少性を軸にしたコウノトリとのかかわり

Bさんが語った新聞などで知ったコウノトリという正式名称への違和感は、多くの人に共通していた。その正式名称が持ち込まれた時期、羽数は急激に減少し見るのも稀になった。産業構造も急激に変化し、農業のあり方も兼業化や機械化によって大きく変化した。昭和30年代まで行われていた田んぼでの漁労も農薬の使用や圃場整備による乾田化などにより行われなくなった。生活は自然に直接働きかけるものではなくなりつつあったのだ。前述のように、コウノトリは自

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

然への働きかけを通して意味ある存在として経験されてきた。働きかけを通さなくなれば意味ある存在として経験されないのである。そこへ外から新たな価値が持ちこまれた。羽数の減少に歯止めをかけるため、「おるのが当たり前」だったコウノトリに「希少性」という価値が付与され、保護の対象となったのだ⁽¹⁸⁾。Qさんは語った。「当たり前…のあれでしたてねえ、昔は。今こそねえ、もう、ほんまに大事な大事なコウノトリ様様ですけど」と。当たり前だったコウノトリの意味は、保護という新しい価値の出現によって問い直されたのである。

人とコウノトリのかかわりは希少性を軸にしたものになった。希少性を軸にした人とコウノトリのかかわりは働きかけによって変化するものではなく、貴重なコウノトリに関係が「あるか」「ないか」という二分法を基本とする。どれくらいかではなく、どのような内容——害鳥に取って代わった希少性など——のかかわりを持つかが意味を持ち、かかわりはその内容への関与に規定されるようになったのである。自然への働きかけとともに経験されたコウノトリが、地域の外から導入された希少性という価値を付与された対象として経験される時、その価値へ積極的に同調しない人にとっては、意味ある存在として経験されなくなったと思われる⁽¹⁹⁾。だから、「ツル」でかかわりを多角的に語った人も、「コウノトリ」では、保護運動に積極的にかかわった人以外は、保護運動を目撃した・聞いたと平板に語るのではないだろうか。それに対して保護と平行であった絶滅過程は、農薬散布という行為が引き起こした生き物の死や自らの身体経験とともにリアリティあるものとして語られる。コウノトリという呼び方への違和感は、生活の中に埋め込まれた存在であったコウノトリが生活と分離し、そこへ希少性や文化性といった異質の価値を持った存在として再び現われたことへの違和感を表していると思われる。

まとめよう。「コウノトリ」においてコウノトリとのかかわりは希少性といった保護概念を軸にしたものに一元化した。コウノトリは保護すべき対象という限定された価値を持つようになり、その価値へ関与しない人はコウノトリとのかかわり自体がなくなり、遠い対象と認識されるようになったのである。働きかけとともに可変的であったコウノトリとのかかわりは、どこにいても・いついても保護すべき対象との一元的なものへ変容したと思われるのである。

6. おわりに——新たな人とコウノトリの関係性の構築に向けて

最後に、人とコウノトリの関係性の構築に向けての課題を提示したい。「ツル」でコウノトリは生活の中に埋め込まれた存在として語られた。コウノトリは生活や生業といった自然への働きかけと切り離しては語られなかった。自然への働きかけによって生活が成り立っていた社会では、自然への働きかけを通して認識されるコウノトリは意味ある存在として経験された。「主体化されたコウノトリ⁽²⁰⁾」とでもいえるものである。それは人が働きかけを通して認識し、さらに働きかけることによってその人の生活の中で意味ある存在として経験されたコウノトリである。コウノトリは客観的な同一性を保証された存在ではなく、働きかけの濃淡によってある時は害鳥と、ある時はきれいな鳥や瑞鳥と経験されるように人との距離を変える存在であった。コウノトリはさまざまな意味を持つ存在であった。

「コウノトリ」でコウノトリは生活から離れた学術的価値を持った保護すべき対象として語ら

れた。コウノトリは生活の中で意味ある存在として経験されなくなる一方で、希少性という価値によって、いづどこにいても保護すべき対象という客観的な同一性を確保した。保護すべき対象という価値は学校やメディアを通して普及され、保護対策が進展したが、その価値へ関与しない人はかかわり自体が希薄になり、「遠い」対象としてしか認識されなくなった。「客体化されたコウノトリ」とでもいえよう。

但馬地方の空からコウノトリが消えて31年経った2002年8月、1羽の野生のコウノトリが飛来した。そして2005年には本格的な野生復帰に向けた試験放鳥が計画されている。30年以上ケージの中にしかいなかったコウノトリが、人とともに暮らす時が着々と近づいている。コウノトリは「コウノトリ」としてだけではあり得なくなるだろう。現在、大きな声になっている人とコウノトリの共生という枠組みは、希少性や生物多様性という価値を前提とした関係性であり、コウノトリは「コウノトリ」として基本的には位置づけられる。だから害鳥と語る農業者は啓蒙の対象となるのである。しかし、農業者が行っていたツルボイは人がコウノトリと身体的、直接的に接する行為であった。ツルボイという行為があったからこそ、「語ることがない」コウノトリが語られ、精神的に「近い」存在として経験されたのである。だから、コウノトリは害鳥として扱われながらも徹底的に排除されることはなかったのであろう⁽²¹⁾。

かつて但馬地方における人とコウノトリのかかわりのあり方は、「ツル」において多様なものであった。生活様式が大きく変わった現在、自然への働きかけを通してコウノトリとかかわることは困難である。それでも自然への働きかけの濃淡によって変化したかかわりの「距離」の持つ意義を再確認することは、「コウノトリ」に限らない、人とコウノトリの関係性の構築に向けた重要な課題になると思われる。その関係は地域住民にとって保護すべき貴重な対象との一元的なものとは限らない。時には不快感を感じるものになるだろう。だからこそコウノトリを生活の中で再度意味ある存在へと変貌させる「何か」を見いだすことが課題になる。ここにコウノトリを「近く」経験させていた自然への身体的、直接的な働きかけによる害をも含んだ多様なかかわりのあり様を現代社会の生活様式の中で問い直すことの意義を確認できるのである。

人とコウノトリの共生イメージとなった冒頭の写真が撮影された1960年は、まさに「ツル」から「コウノトリ」へと、人とコウノトリのかかわりが変わりつつあった頃であった。40数年後の現在、「ツル」から「コウノトリ」、そして新たな“コウノトリ”へと変貌させるその「何か」を見いだすことが、次なる課題である⁽²²⁾。

謝辞 本稿は兵庫県立コウノトリの郷公園「コウノトリ歴史資料収集整理等事業」の成果の一部である。

お話を聞かせて下さった414人の方々に深く感謝申し上げます。安達佐栄子、安達吉典、藤原博志、平尾有美、廣瀬志保、神谷勉、河原宏明、川本寿信、北垣マヨ、木下佳樹、松本浄一、松本敬仁、松岡詩子、見塚ゆかり、宮崎裕子、中井悦子、中島義博、成田智子、西田武夫、西垣保彦、西村珠巳、沖野貞造、大井芳江、小倉悦子、佐藤親志、瀬利西子、竹中豊、田村慶子、谷田美代子、谷垣恵子、都外川佳千、山盛亜紀、山本真奈美、山本晋の諸氏には聞き取り調査等を一緒に行なっていただいた。郷公園総務課長（調査当時）の及川泰秀、事務補助員の小谷繁子、飼育員の川越雄一、豊岡市コウノトリ文化館館長の佐竹節夫、同館係長の濱田健治郎の諸氏にも聞き取り調査を行なっていただいた。郷公園の職員の方々にも大変お世話になった。記して感謝します。

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

注

- (1) 本稿で取り上げる内容は京都府久美浜町の聞き取りも含んでおり、厳密には但馬地方に限られない。
- (2) 厳密には「絶滅の危機に瀕している」絶滅危惧種である（環境庁編，1991：92）。秋から春にかけて大陸から時々飛来し、観察されているからである。例えば1羽のコウノトリが2000年12月に宮崎県に飛来し、西日本を点々とし、2002年8月5日にコウノトリの郷公園に飛来した。31年振りの野生コウノトリの飛来である。しかし、日本に留鳥として生息し繁殖していた個体群は消滅したという意味で、日本では絶滅したといえる。
- (3) 郷公園は、絶滅の危機にあるコウノトリという種を飼育下で繁殖させ、同種の野生復帰を目的とした施設であり、野生復帰を目指した研究を行っている。郷公園田園生態研究部には、姫路工業大学自然・環境科学研究所の教員を兼務する環境保全学、鳥類生態学、景観生態学、環境社会学の4人の研究者が所属している。
- (4) 豊岡市周辺で取り組んでいる野生復帰事業は、人口4.8万人の兵庫県北部の中核都市で実施する点でトキや諸外国の事例と大きく異なる試みである。豊岡市は、近年、若年層の流出や鞆という地場産業の衰退、インフラの未整備、高等教育機関の少なさなど多くの地域課題をかかえている。そうした課題をかかえる一方で、空間的には都市、農地、里山と重層的な特徴を持っており、人と自然が近い環境と共存しうる都市になる可能性を持っている。コウノトリの野生復帰が環境保全型の地域づくりに結びつく施策が求められるだろう。地域づくりとしての野生復帰の研究は、今後の課題としたい（池田・菊地，2002：15-16）。
- (5) 後述するようにコウノトリは語り手によって多様に語られる。それは、聞き取りの場で聞き手とコミュニケーションを交わすことで、語り手がとらえ直したコウノトリである。そこには聞き手と語り手の解釈と主観が含まれているが、語り手がそうした当事者としてのコウノトリの意味を見いだすことで、生活の現場から人とコウノトリのかかわりを再構成してとらえることができるのではないだろうか。
- (6) コウノトリの保護運動は、別の機会に論じる予定である。阪本（1966）を参照。
- (7) 郷公園の事業として2002年1月から6月まで実施した。既存の情報やアンケート調査を手がかりに芋づる式に拡大し、農業者や元行政職員など414人から聞き取ることができ、約2800点の写真等をデジタル化した。調査は、この事業のため郷公園から雇用された但馬地方在住の20代から60代の人々と共同で実施した。
- (8) 松井健は「自然のなかに立ち入ることを要請するマイナー・サブシステムは、身体全体を通して自然との直接的な関わりを体験させ、その時その場所において、深く自然につつまれていることを鮮烈に体感させるという点で、さらに突出した意味を記憶の沈殿の深層にもたらす」（松井，1998：267）と述べている。
- (9) 嘉田由紀子の提唱する資料提示型インタビューも参考になる手法である（嘉田，1997）。
- (10) 筆者は野生復帰を目指す郷公園の研究者として聞き取りを行っている。したがって、調査の場は野生復帰という価値をめぐる場でもある。例えば語り手が筆者に対し「あんなもん放すんか」とか「どうするつもりなん」と問いかけることが度々ある。調査の場は野生復帰の評価の場へと容易に変わるのである。
- (11) コウノトリのことを聞きに来た筆者に対して、コウノトリのことよりも生活のことを語ったことへの言い分であるかもしれない。「こんな話なんの役にもたたんで」という語り手は、調査の場の力学を表しているように思われる。「よー聞きに来てくれました」と感謝されることもある。聞き取りの場は、語り手と聞き手がコウノトリをめぐるコミュニケーションを行いながら、コウノトリに関する知識が創出される場である。
- (12) 今回の調査では、営巣地に限らず田んぼなど採食場所に関する情報が多く寄せられた。
- (13) 田んぼでの生業複合に関しては安室（1998）に詳しい。

- (14) 嘉田由紀子は、空間的には同じ場所であっても、動植物のライフサイクルにあわせて、人間の側が利用原則を変えていく資源利用システムを重層的資源利用と呼び、その原則の1つとして、人の“労働”あるいは“働きかけ”を重視することを指摘している（嘉田，1997：80）。
- (15) もちろん、保護運動に直接かかわった人は運動の経験を語っている。
- (16) 豊岡市のあるムラに残された「水田除草剤 24 D の適正使用について」という文書によれば、1954年から24 D は使用されていた。
- (17) コウノトリの絶滅要因は、①圃場整備などによる低湿地帯の喪失や営巣場である松の減少といった生息地の消失、②農薬など有害物質による汚染、③個体数の減少した時点での遺伝的多様性の減少の3点が現時点で考えられている（内藤・池田，2001：318-319）。絶滅という語りで、②が最も語られ、次いで①も語られる。
- (18) 保護運動に尽力したとされている阪本勝兵庫県知事（当時）はこう述べている。「小学校の児童、中学校の生徒、先生や父兄の来集をもとめ、山階博士との一件をありのままに伝え、コウノトリという鳥がいかに貴重な鳥であるかということについて、貧しい知識をしぼり出しながら懇々と説いた。そして子供たちにたいし、河原や田にいる鳥に石を投げたり、棒で追いかけたり、空気銃で撃つようなことはしないようにと熱心に頼んだ」（阪本 1966：9）。しかし、希少性だけでは理解を得るのが難しいと考えたのか、以下のようにも述べている。「絶滅の危機に立つあわれなコウノトリのためにそそがれた愛情は、いかにたじけなく尊いものであったか。人間と動物が愛情によって固く結ばれる文明こそが、人類文明の名に値するものだ。あらゆる努力を傾倒して、この哀鳥の滅亡を救うことに成功したとき、日本人ははじめて文明国民として世界中から認められるだろう。『ほろびゆくものはみなうつくしい』とは詩人の詠嘆だ。だが、亡びゆくものを救うことこそ、もっと美しい人間の任務である。」（阪本，1966：13）ここでは文化性という価値が主張されている。
- (19) 保護運動の是非を論じているわけではない。思考錯誤の保護対策の実施が、現在の野生復帰へとつながっていることは明らかである。ここでは、地域住民にとってのコウノトリの意味の変遷を論じている。
- (20) 安室（1998：21-22）を参考にした。
- (21) 害獣対策と人と野生生物との精神的距離に関しては、丸山（1997）参照。
- (22) 「客体化されたコウノトリ」を出現させた主体のあり様の解明が必要である。したがって現時点で「何か」はなかなか見えないが、地域住民が当事者として野生復帰にかかわる回路の多元化にその方向性が見えてくるかもしれない。それは住民参加の問題でもあるが、本稿の議論を踏まえれば、住民参加型調査によるローカルな知識の再評価、自然への働きかけの多元性の再生などが内実として考えられるかもしれない。

文献

- 藤村美穂，1994，「自然をめぐる『公』と『私』の境界」鳥越皓之編『試みとしての環境民俗学——琵琶湖のフィールドから』雄山閣：147-166。
- 反差別国際連帯解放研究所しが編，1995，『語りの力——被差別部落の生活史から』弘文堂。池田啓，2000，「コウノトリの野生復帰をめざして——地域の人々と研究者が取り組む新しい科学」『科学』70（7）：569-578。
- 池田啓，2000，「コウノトリの野生復帰をめざして——地域の人々と研究者が取り組む新しい科学」『科学』70（7）：569-578。
- 池田啓・菊地直樹，2002，「コウノトリの野生復帰とその課題」『環境と公害』31（4）：10-16。
- IUCN，1993，1994 IUCN Red List of Threatened Animals.
- 嘉田由紀子，1997，「生活実践からつむぎ出される重層的な所有観——余呉湖周辺の共有資源の利用と所

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

- 有」『環境社会学研究』3：72-85.
- , 2001, 『水辺ぐらしの環境学——琵琶湖と世界の湖から』昭和堂.
- 嘉田由紀子・遊磨正秀, 2000, 『水辺遊びの生態学——琵琶湖地域の三世代の語りから』農山漁村文化協会.
- 環境庁編, 1991, 『日本の絶滅のおそれのある野生生物——脊椎動物編』(財)日本野生生物研究センター.
- 菊地直樹, 2001, 「コウノトリの野生復帰と地域からの展開」『エコミュージアム研究』4：76-83.
- 丸山康司, 1997, 「『自然保護』再考——青森県脇野沢村における『北限のサル』と『山猿』」『環境社会学研究』3：149-162.
- 松井健, 1998, 「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店.
- 内藤和明・池田啓, 2001, 「コウノトリの郷を創る——野生復帰のための環境整備」『ランドスケープ研究』64(4)：318-321.
- Polanyi, M., 1966=1980, 『暗黙知の次元——言語から非言語へ』紀伊國屋書店.
- 阪本勝, 1966, 『コウノトリ』神戸新聞社.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 菅豊, 1998, 「深い遊び——マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店.
- 鳥越皓之・嘉田由紀子編, 1991, 『水と人の環境史——琵琶湖報告書【増補版】』御茶の水書房.
- 豊岡市, 2001, 『第6次豊岡市総合計画「まちづくり市民アンケート」「行政機関・各種団体等アンケート」調査結果報告書』.
- 安田健, 1987, 『江戸諸国産物帳——丹羽正伯の人と仕事』晶文社.
- 安室知, 1998, 『水田をめぐる民俗学的研究——日本稲作の展開と構造』慶友社.
- 和田宏, 2002, 『和漢古典動物考』八坂書房.

(きくち・なおき)

〈2003年2月28日受理, 2003年6月27日掲載決定〉

A Study about the Relationship between Local People and the Oriental White Stork in the Tajima District, Hyogo Prefecture : Reviewing the Terms, "Turu" and "Konotori"

KIKUCHI Naoki

Himeji Institute of Technology/Hyogo Prefectural Homeland for the Oriental White Stork

128 Shou-unji, Toyooka, Hyogo, 668-0814, JAPAN

At present, the project for reintroducing the oriental white stork (*Ciconia boyciana* Swinhoe) that has been extinct since 1971 in the wild is ongoing in the Tajima District, Hyogo Prefecture. Many efforts have been made to preserve the stork population and to improve community coexistence with the stork. It seems that the idea of coexistence with the stork is widely accepted in the Tajima District. Nevertheless, the storks are thought to be harmful birds because they trampled rice plants. In this situation, the enlightenment and education of the local people is a necessity in order to coexist. However, it is not clear how the local people have ever been related to the stork. From a practical viewpoint about this project, it is essential to know how the local people (especially farmers) will relate to the stork. The purpose of this paper is to describe the complexity of the relationship between the local people and the stork in Tajima District.

We approach this matter using a hearing survey. A lot of narrators talk about the stork in two terms. One is "Turu" (that means the crane scientifically in Japanese); another is "Konotori" (that is stork's scientific name in Japanese). By reviewing narratives, we find that "Turu", the stork is narrated as an existence close to everyday life in local community; "Konotori", the stork is narrated as an object which involves scientific values such as a protected bird. We pay attention to the meaning of both terms in order to consider the relationship with the stork.

With "Turu", there is variable relationship based on the "degree" of working with nature. The local people do not only experience the stork itself, they also experience it as working with nature. The Storks are experienced as a "near" existence to the local people. With "Konotori", there is specialized relationship with the stork based on a concept of protection, such being the rarity. People who do not share such values have no concern with the stork. The stork has become an object that is "far" from the local people.

In the Tajima where which aims at reintroducing the project in the future, the people-stork relationship will be impossible without the "Konotori". Restructuring a relationship which is not limited to the "Konotori", in the context of modern life style, and

菊地：兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論

reconsidering the meaning of working with nature, which made the stork near, becomes important.

Keywords and phrases : the oriental white stork, reintroducing project, working with nature, "Turu", "Konotori"